

巻 頭 言

九州大学マス・フォア・インダストリ研究所
小磯深幸

去る9月18日から21日まで、日本数学会秋季総合分科会が九州大学伊都キャンパスにて開催された。このキャンパスは、糸島半島の中央より少し東寄り、福岡市の西端に近い場所にある。福岡市の中心部からは鉄道やバスで約1時間、途中の車窓からは博多湾が見え隠れし、青い海と青い空が目心地良い。海岸沿いには、鎌倉時代に蒙古襲来に備えて築かれた石造りの防塁が残り、海の向こうの国々を身近に感じる場所でもある。

さて、数学には国境が無く以前から国際交流が盛んだが、特に近年は地理的にも近い東アジアの国々との交流が盛んになってきている。今回の学会中にも、日本数学会と韓国及び台湾の数学会との交流事業が行われた。学会開始前日の9月17日に開催された日韓数学会合同会議2012 (MSJ-KMS Joint Meeting 2012, 以下では合同会議と呼ぶ)、学会での大韓数学会会員15名による一般講演、及び、台湾数学会代表団との交流事業である。私は合同会議の組織委員並びに現地委員の一人として会議の企画・運営に携わった。この小文では、会議の報告とそれに関連する今後のことなどについて述べてみたい。

合同会議は、日本数学会と大韓数学会の主催、九州大学数理学研究院及びマス・フォア・インダストリ研究所の後援により行われた。組織委員8名(日韓4名ずつ)、実務委員17名に加え、九大数理の学部及び大学院学生16名が前日の準備と当日の会議開催を手伝ってくれた。

合同会議開催の9月17日は祝日であったため、昼食の便を考えて市の中心に近い九州大学医学部百年講堂を会場とした。台風16号の接近により前日の夕刻から当日午前中にかけて風が強く、JR・地下鉄のダイヤが乱れて世話人をヒヤリとさせたが、幸い大きな混乱は無く、会議は予定通り午前10時に始まった。午前中は日本側・韓国側1名ずつの全体講演、午後は、代数、幾何・トポロジー、解析、確率論・応用数学の計4つのパラレルセッションのそれぞれにおいて日本側・韓国側2名ずつの講演が行われた。参加者数約200名という盛況で、韓国から来日された数学者約30名、台湾数学会代表団4名、他にも海外から来日中の数学者の姿が見え、和やかな国際交流の場が繰り広げられた。午前の全体講演は、中村玄氏(北海道大学・教授)による「Inversion schemes for diffusion equations」、及び、Jun-Muk Hwang氏(KIAS即ち韓国高等科学院・教授)による「Compactifications of \mathbb{C}^n 」であった。中村氏は、熱画像法や断層写真撮影等に応用可能な偏微分方程式の逆問題解決の統一的な理論と方法を、Hwang氏は n 次元複素ユークリッド空間のコンパクト化(一意的には決まらない! しかも分類も困難!)を論じられた。それぞれ、解析・応用解析、代数幾何・複素幾何という分野と言って良いであろう。二つとも専門外の聴衆にも

配慮された質の高い講演であり、日韓の数学者の業績も含めて解説された。中村氏の講演は統一的に整理された理論とその応用を含む格調高い内容であり、Jun-Muk Hwang 氏は、問題の背景及び歴史的な概観から始まり代数幾何の専門的な概念を含む最先端の研究まで、時にユーモアを含めながら解説された。共に、それに参加できたことが幸運に感じられる講演であった。午後のパラレルセッションには聴きたいと思わせる魅力的な課題がいくつも同時刻にあり、参加者の皆さんからの「一度に一つしか聴けないのが残念」という、世話人としては嬉しい不満(?)の声も聞いた。午前午後共に、良く準備された講演と活発な質疑応答、国際的な雰囲気、会議を手伝ってくれた学生の中には研究意欲を大いに触発された者もいたらしく、学会終了後に私のところに感想を言いに来た者もいる。パラレルセッションの日韓「2名ずつ」は、中堅と若手の1名ずつとしたこと、学会で一般講演された大韓数学会会員の方々は若手が中心であったことも、日本の若手研究者・学生に良い刺激を与えたようだ。17日夕刻には合同会議の懇親会が行われ、会議の会場から地下鉄で三駅離れた場所であったにもかかわらず、約90名が参加された。数学の研究はもちろん、さまざまな話題で会場が談笑に包まれた約2時間であった。会の最後には、大韓数学会会長 Dong Youp Suh 氏がその挨拶の中で「数学で平和を」と述べられ、会場中に大きな拍手が湧いた。

今回の交流事業の意義は、と問われれば、(数学の研究集会が持つ一般的な意義の他に)まず次の二点をあげたい。日本、韓国、台湾の数学者間の交流の進展、及び、日本数学会の活動の世界への発信の機会の一つとなったことである。さらに、未来を担う若手研究者・学生にもこのような活動を知ってもらえたことも良かったと思う。

さて、今後についても語らねばなるまい。言語や研究環境・生活環境の異なる諸外国との研究交流は、緊張感も伴うが良い刺激にもなる。特に、時差の少ない近隣諸国との交流は時間的なロスも少ない。韓国、台湾、中国との各専門分野内での研究交流はすでにずいぶん盛んであるが、今回の学会レベルの交流には、別の良い点もあると思われる。たとえば、専門分野別の研究集会では聴けない内容の講演を聴くことができるし、他分野の研究者との会話(雑談も含め)から思いがけない視点や研究テーマを得ることもあるだろう。それぞれの国には研究分野の偏りがあるだろうから、その意味でも協力して学会を開催するのは利点がある。中堅研究者には、(好むと好まないとにかかわらず、避けて通るのは難しい)大学運営・学会運営・研究環境整備・教育問題等を、互いに異なる経験をもとに語り合うことのできる新しい知人を得ることもあるだろう。また、とりわけ若手研究者や学生にとっては、国際的な経験を積み、それにより研究意欲を刺激される良い機会ともなろう。今回の経験を踏まえ、今後もこのような会合を継続・発展させていくことを期待する。

最後に、今回の合同会議開催にご協力くださった方々、会議にご参加くださった方々に感謝申し上げ、この小文を終わりたい。